

報恩講



御同朋の社会をめざす運動(実践運動)
兵庫教区委員会

仏さまの光に
照されて
私の心に
明りがつく

When the Buddha shines that Light on me,
oh my whole heart just lights up!

真宗教団連合2024年法語カレンダーより



『報恩講について』 ほうおんこう

報恩とは、恩に報いる、という意味です。恩とは、一説には、大きな敷物にゆつたりと寝転んでいる状態をいうようです。すると、ゆつたりしていて恵まれている状況にあるようです。講は、内部構造を解明し事理に通じ、事案を考えることを表すようです。つまり、親鸞聖人が一生をかけて、法然聖人より受けた教えを私たちが、その教えによってゆつたりと生きているとのこととなります。

私は“ゆつたり”とはとても生きていません。死ぬことが、イヤでたまらないのです。私には高校3年生になる双子の娘がいます。せめて次の進路までは生きていたいです。しかし、蓮如上人が「白骨の御文章」で仰るように、「老少不定」の今を生きています。いづとうなるかわからない今を、お念仏と共に懸命に生きることしかできないようにも思っています。

では、なぜ人生の最終点としか思えない、“死”を「往生」と言われたのでしょうか。それは、仏さまでない私や、親鸞聖人でさえも「ひそかにおもひれば」と仰るように、はつきりとはわかりませんが、私なりに推測してみます。

字が変わると意味が変わります。あなたは死ぬのではない、往生（往き生まれる）する人生を生きているのですよ、と言われたらいかがでしょうか。そのお言葉は、私に大きな勇気を与えてくださいました。いまや、私は“死”がイヤでたまらないということはありませんでした。死ではなく、往生して仏となる人生を送り、「願生彼国」（「一念多念文意」）にあるように、彼の阿弥陀仏の国に生まれさせるという願いの中で、そのご恩に報いる人生を共に歩みましょう。



揖龍西組源徳寺窪田憲龍